

大学生の運動有能感及び自尊感情と部活動経験の関連

宮澤信太郎（静岡大学）

【目的】

本研究は、大学生を対象として、運動有能感及び自尊感情と中学校・高等学校での部活動経験との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 調査対象と調査時期

調査対象は、国立大学法人 S 大学の平成 29 年度入学生のうち、工学部を除いた 1308 名を対象とした。回収したのは 1226 名であり、このうち有効回答だった 1139 人(男性：675 人、女性：464 人)を本研究での分析対象とした。

調査時期は平成 29 年 4 月であった。

2. 調査方法と調査内容

調査は、無記名自記式質問紙法を用いて行い、授業時における集合調査法によって実施した。調査内容は、①基本属性についての項目(年齢、性別、所属学部、学年)、②中学校・高等学校での部活動経験の項目(所属部活動【運動部・文化部・無所属】、所属部活動名)、③運動有能感に関する項目(運動有能感尺度、岡澤ら、1996)、④自尊感情に関する項目(Rosenberg の自尊感情尺度日本語版、山本ら、1982)とした。運動有能感と自尊感情については、「とても当てはまる」から「全くあてはまらない」の 5 件法で得点を算出した。

3. 分析方法

調査結果の分析は、単純集計後、「中学校での所属部活動」、「高等学校での所属部活動」、「中学校・高等学校を通しての所属部活動」と運動有能感、自尊感情との関連について、 χ^2 検定、t 検定、一元配置分散分析、Pearson の積率相関分析を行った。また、運動有能感、自尊感情の平均点を基準として、対象者を高群と低群の 2 群に分けての分析も行った。検定結果は、有意水準 5%をもって有意差を認めることとした。統計解析には IBM SPSS Statistics ver.22 を利用した。

【結果と考察】

(1) 運動有能感・自尊感情について(部活動比較)

運動有能感は、中学校・高等学校ともに運動部所属者で文化部所属者と無所属者に比べ有意に高か

った。また、中学校・高等学校ともに、運動有能感高群で運動部所属者が多い傾向が明らかであった。

自尊感情は、高等学校において、運動部所属者で文化部所属者に比べ有意に高かった。また、高等学校において自尊感情高群に運動部所属者が多い傾向が明らかであった。

運動有能感については、今回使用した運動有能感尺度が、従来の有能感理論の問題点を踏まえて作られたものであることから、今回の調査においても、運動部所属者の「身体的有能さの認知」が特に高かったことで今回のような結果が得られたと考えられる。また自尊感情については、運動場面において、自身を肯定的に捉える機会が多いことが要因として考えられる。

(2) 運動有能感と自尊感情との相関

運動有能感と自尊感情との間には、有意な正の相関が認められた。また、運動有能感全ての下位因子と自尊感情の間にも、有意な正の相関が認められた。

(3) 運動部活動の継続性、種目の継続性による比較

運動部に中学校・高等学校で継続して所属した者が、運動部に中学、高等学校のいずれかで所属した者に比べて、運動有能感に加えて、自尊感情においても有意に高かった。

運動部に継続して所属した者の中で、同一種目を行った者が異なる種目を行った者に比べて、運動有能感総得点と「身体的有能さの認知」が有意に高かったが、自尊感情には有意差は認められなかった。これらのことより、自尊感情には、運動部に中学校・高等学校と継続して所属したことが影響を与えたことが示唆された。

【結論】

上記の結果は、運動有能感及び自尊感情と中学校・高等学校での部活動経験が密接に関連していることを示唆するものである。

【引用文献】

岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996)：運動有能感構造とその発達及び性差に関する研究 スポーツ教育学研究, 16(2), 144-155
山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982)：認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68